

生物多様性の保全活動のパターン・ランゲージの作成

研究代表者 井庭崇（総合政策学部 准教授）

共同研究者 一ノ瀬友博（環境情報学部 教授）

鎌田磨人（徳島大学大学院社会産業理工学研究部 教授）

鎌田安里紗（SFC研究所 上席所員）

【研究概要】

本研究では、生物多様性の保全活動をするときに陥りがちな問題に対して、その解決や解消を可能とする実践やコミュニケーションを促す新しい「ことば」（パターン・ランゲージ）を作成する。作成にあたっては、生態系に関する専門的知識のほか、日本や海外の事例のなかで参考になる活動実践事例を集め、それらを集約して抽象化していく。本共同研究の成果によって、生物多様性保全を担う次世代を育成することを支援するとともに、日本全国へと発信していくことを目指す。

【研究背景】

生物多様性の損失が進み、生態系サービスの質・量が損なわれてきているという危機感のもと、全国各地で保全および持続可能な利用のための活動が推進されてきている。いくつかの地域ではその活動が功を奏し、具体的な成果を上げている一方で、活動に問題が生じて行き詰まっている地域も多い。

例えば、自然保護活動にはなかなか予算がつきにくく、ボランティアがその担い手になっているケースが多いが、近年高齢化が進んでいて後継者がいないために活動の継続が難しいというところが多く存在する。しかも、そのような活動をされている方は、自然の愛好家の方が多く、若者など自然に馴染みのない素人には近づきたい印象があり、広がっていかない。また、すでに活動している人たちのなかでも、鳥、虫、植物など、興味対象の違いによって保全の目標が異なり、その違いが協働を阻んでいる理由にもなっている。

このような現状に対して、生物多様性保全の観点から、各ステークホルダーの視点を超えて協働できるような共通言語の必要性が高まっている。しかも、そのような共通言語は単なるキーワードやスローガンではなく、各自が実践可能なものである必要がある。そこで、本研究では、実践知（秘訣、コツ、経験則）を言語化して共有する「パターン・ランゲージ」の方法論にもとづき、生物多様性の保全のための実践パターン・ランゲージを作成する。

パターン・ランゲージは、実践知（秘訣、コツ、経験則）を言語化して共有する方法である。個人や地域ごとにもっている実践知を言語化することで、他の人や他の地域にもその実践知を共有しやすくなり、その人・地域の実践を支援することができる。また、それらを共通言語とすることで、協働的な活動もしやすくなる。パターン・ランゲージは、実践知を小さな単位で捉え、それに名前をつける。何十から何百という数の経験則を言語化し、それらのゆるやかな体系によって全体を表す。いくつもの経験に共通して見られる共通「パターン」をあぶり出し、それを記述し、名づけ、「ランゲージ」をつくるのだ。それゆえ、この方法は、「パターン・ランゲージ」と呼ばれる。

【研究内容】

パターン・ランゲージの作成では、マイニングのモデルケースとなりうる地域における事例調査とインタビューを通して、実践知の共通パターンを抽出する（Phase 1 - マイニング）。その後、抽出された共通パターンを、パターンの形式である「状況」「問題」「解決」「結果」のフォーマットで文章にしていく（Phase 2 - ライティング）。この段階で、何度もレビューを重ね、文章の修正・洗練をしていく。その後、それらのパターンを象徴的に表す名前とイラストを作成する（Phase 3 - シンボライジング）。これらのプロセスを経て、パターン・ランゲージが形づくられる。

今年度は、広島県北広島町で活動を行う認定NPO法人西中国山地自然史研究会のメンバーを中心にインタビューを実施し、23のパターンを抽出した。以下に具体的なプロセスを示す。

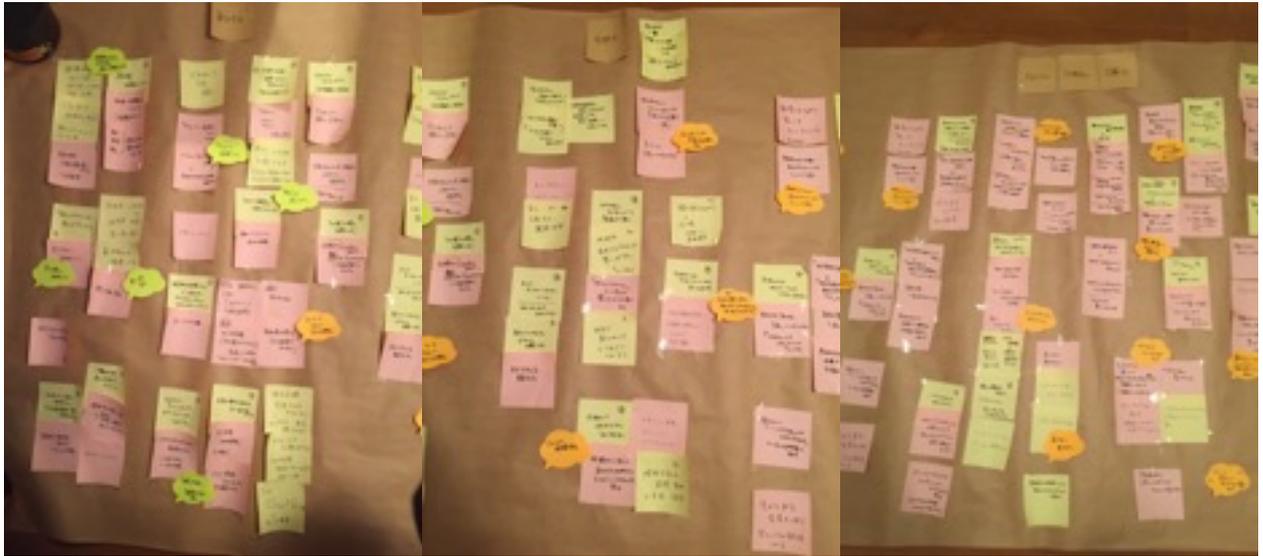
(1)インタビュー調査（2017年11月26～29日）

広島県北広島町芸北地域を訪ね、活動関係者にインタビューを実施（1.5時間×5名）。また、活動地となっている里山や小学校、町役場を訪問した。



(2) クラスタリング

インタビューから得た具体的なエピソードや情報をKJ法（川喜田，1967）を用いて分類し、ボトムアップにまとまりを作成。



(3) ライティング

抽出された要素を、パターン・ランゲージの形式である「状況」「問題」「解決」「結果」のフォーマットに基づいて文章化を行った。

(4) レビュー（2018年1月9～11日）

広島県北広島町芸北地域を再訪し、記述したパターンの内容について、改善に向けたディスカッションを行なった。



【研究成果】

(1)～(4)の結果、下記の23のパターンが抽出・記述された。現状は、生態系保全を目的とする多様な主体が協力・連携し、継続的に活動を行なっていくための「協働」の知恵がメインで記述されている。今後の調査を通して、地域における特定の生態系保全のための課題設定とそこに向けた改善策のデザインをより良く行うための「保全活動の設計」の知恵のマイニングを行

い、パターンとして追記を行なっていく。

乗りたい提案／個人的なお誘い／熱量の引き出し／注意の先取り／ステップアップの余地／覚悟の見える化／芋づる式の説明／変化のテコ／ゆるい入り口／和やかな場づくり／次に繋がるリクエスト／参加者視点の魅力／顔の見える繋がり／雑談のなかの思い／個別の提案／馴染みのある言葉／巻き込まれることから／相手のメリット／言葉の重なり／流れを汲んだ提案／課題のすり合わせ／成功イメージの共有／スピード発進

これらの研究成果物の活用を通して期待される成果として、以下のような特徴・機能を挙げることができる。

- ・属人的になっていた、生物多様性保全を進める知見の把握と可視化
- ・各地域に閉じていた、生物多様性保全を進める知見の把握と可視化
- ・複数の地域や、異なるセクターの協働を促進するための共通言語
- ・作成されるパターン・ランゲージの公開・提供を通じた日本全国での生物多様性保全の活動支援
- ・作成されるパターン・ランゲージの公開・提供を通じた生物多様性保全を担う後継者の育成

生物多様性保全における取り組みは、地域ごとの状況によって求められる解決策が大きく異なる。しかし、これまでは、成功した地域の事例を横滑りさせて他地域に応用することしかなく、結果として状況が異なるところに表面的な解決策を適応しても、上手くいかない、という問題が起ることが多かった。しかし、パターン・ランゲージで、上手くいく方法の本質的なパターンを共有する事ができれば、各々の地域が自らの状況に即して成功の秘訣を再現することができ、改善に近づくことが期待される。

また、成功事例として取り上げられる地域には、必ず活動を推進した中心人物が存在するが、その人物の属人的なスキルとみなされ「○○さんだからできる」という諦めを生んでしまうことがある。しかし、パターン・ランゲージ化することにより、成功の属人性を薄め、「わたしにもできる」という感覚をより多くの人を持つことにつながり、行動をモチベートしたり、若い世代を巻き込んだりすることが期待される。

【今後の展開】

引き続き、広島県北広島町、宮崎県綾町、神奈川県藤沢市、徳島県、滋賀県など、生態系保全の取り組みにおける先進事例とされている地域でヒアリングを行い、パターンの記述を行う。知見が集まり、全体性を持ったパターン・ランゲージが記述できた段階で、成果物をカードや書籍としてまとめ、他地域での活用を行なっていく予定である。本研究の成果によって、日本全国各地で行われている生態系保全活動の実践支援、また活動を担う次世代を育成することを支援することを目指す。

【参考文献】

川喜田二郎 (1967) 『発想法：創造性開発のために』 中央公論社